日本赤十字看護学会誌　J. Jpn. Red Cross Soc. Nurs. Sci Vol.7, No.1, pp.45-57, 2007

原　　著

若年妊婦の妊娠・分娩・育児期におけるケアニーズの分析
－ドゥーラの役割の検討に向けて－

工藤　優子[1]，佐藤　愛[2]，新道　幸惠[2]，高田　昌代[3]，
谷川　裕子[3]，西野　加代子[4]，宮本　昭子[4]

Analysis of care needs of young women during pregnancy, childbirth and childrearing
－ For the examination of the role of Doula －

KUDO Yuko，SATO Megumi，SINDO Sachie，TAKADA Masayo，
TANIKAWA Yuko，NISHINO Kayoko，MIYAMOTO Akiko

キイワード：若年妊婦、ドゥーラ
Key Words：young women during pregnancy, childbirth and childrearing，doula

Abstract

The purpose of this study was to clarify care needs of young women during pregnancy, childbirth and childrearing based on the experiences to investigate the role of doula throughout these periods. Semi-structured interviews were carried out for eight first-time expectant mothers aged from 16 to 22. The interviews were first conducted during pregnancy and continued through the childrearing period. The results obtained from the interviews were subjected to content analysis.

As a result, the care needs of young women during pregnancy include (1) accepting the fact of pregnancy, (2) arranging everyday life during pregnancy, (3) caring for the baby in her womb, (4) enhancing awareness of becoming a mother, (5) preparing for the delivery, (6) building the new partnership with her husband, (7) arranging the new relationship with her parents, and (8) arranging appropriate relationships with her friends and neighbors.

The care needs during childbirth include (1) receiving psychological support at delivery, (2) receiving physical support at delivery, (3) feeling satisfaction of a childbirth experience,

[1]弘前大学医学部附属病院　[2]青森県立保健大学
[3]神戸市看護大学　[4]弘前大学

受付日：2006年10月30日
採用日：2007年 2 月23日

(4) understanding the necessity of medical intervention, (5) making a determination herself in case of medical intervention, (6) convey a feeling at the time of childbirth freely.

The care needs during childrearing include (1) enhancing awareness of being a mother, (2) establishing the relationship with her newborn baby, (3) obtaining support in childrearing, (4) deal with uneasiness of child care, (5) learning childrearing techniques, (6) arranging everyday life after childbirth, (7) deepening the partnership with her husband, and (8) establishing a new relationship with her parents.

In this regard, the roles of doula are thought to include (1) listening to her, (2) staying with the women and sharing her experience, (3) giving support, encouragement and praise (4) intervening in re-establishing relationships between the women and her relatives and friends.

要旨

本研究の目的は、若年妊婦の体験から妊娠期・分娩期・育児期におけるケアニーズを明らかにし、ドゥーラの役割を探ることである。16～22歳の初産婦8名を対象に、妊娠期から育児期まで継続して半構造化面接法を用いてインタビューを行った。分析は内容分析の手法を用いて行った。

その結果、妊娠期のケアニーズには①妊娠を受容する、②妊娠中の生活を整える、③胎児への関心を高める、④親意識を高める、⑤分娩に対する準備を整える、⑥夫と新たな関係を築く、⑦両親との関係を調整する、⑧友人や近隣者との関係を調整するがあった。分娩期のケアニーズには①分娩時の心理的サポートを得る、②分娩時の身体的サポートを得る、③分娩体験の満足感をもつ、④医学的介入の必要性を理解する、⑤医学的介入の自己決定をする、⑥分娩時に自由に気持ちを伝えるがあった。育児期のケアニーズには①親としての自覚を高める、②子どもとの関係を築く、③育児のサポートを得る、④育児の不安に対処する、⑤育児技術を獲得する、⑥産後の生活を整える、⑦夫との絆を深める、⑧両親との絆を深めるがあった。

これに対するドゥーラの役割には①傾聴する、②傍にいて共に体験する、④支持し、励まし、賞賛する、⑤他者との関係調整をするが考えられた。

Ⅰ．はじめに

母親になる過程は、思春期からの準備性と、妊娠以降の経験中に周囲からの支援によって、成熟へと発展することが先行研究によって明らかになっている。しかし、現代の出産と育児を取り巻く状況は、家族形態の変容、少子化、虐待などの社会問題が背景にあり、女性とそのパートナーが親となる発達課題を達成していくためには、多くの支援が必要である。さらに先に述べた要件を備える機会が少ないままに親になってしまった若年妊婦は、妊娠・出産がハイリスクとなりやすいなどの身体的な問題と、望まない妊娠が多い、経済的基盤が脆弱である、未婚や駆け込み的に結婚するケースも多いなどの、心理・社会的な問題が起こりやすく（益田，2003，151）、そのため親となる発達課題を達成できなくなる危険性が大きい。若年妊婦とそのパートナーが親となっていくためには、専門家と家族が協力し社会的支援を十分に受けられるような援助が必要である。さらに本研究では、若年妊婦の支援者としてドゥーラの存在に焦点をあてた。

ドゥーラとは、ほかの女性を助ける女性という意味のギリシャ語である。現在この言葉は、出産前・出産中・出産後の母親に対し身体的・情緒的な支援を継続して行い、情報を提供する、出産に関する経験を積んだ女性のことを意味するようになっている（クラウスら，2006，4）。ドゥーラが

産婦の支援を行うことにより、分娩所要時間の短縮や疼痛の緩和、帝王切開率の低下などの効果があることが、多くの先行研究で明らかにされている。さらにManninngら（1998，74）は、ドゥーラの支援を受けて出産した女性の多くが、新生児により大きな愛情を示し、より多くの時間を一緒に過ごし、不安や抑うつが少なく、自発性のレベルも高いなど母親役割を獲得していく上で大きな支援になると述べている。

しかし、わが国ではドゥーラによる若年妊婦を支援するシステムは無く、その支援システムの要件も明らかにされていない。さらに、ドゥーラの役割や効果に関する研究はこれまで海外では多くされてきているものの、日本において研究されたものはほとんどない。そこで、本研究では、若年妊婦が母親として成長する過程において必要と思われるケアニーズを明らかにし、妊娠期･分娩期･育児期におけるドゥーラの役割を探ることを目的に調査を行った。

Ⅱ．用語の定義

ドゥーラ：産前・出産中・産後の母親を身体的にも情緒的にも継続して支援し、情報を提供することのできる、専門家ではないが妊娠・出産・育児とそのケアに関する一定の研修を受けた、出産経験のある女性（家族や親族以外）をいう。

若年妊婦：16歳から22歳までの初産婦をいう。

ケアニーズ：若年の妊産褥婦の語りのなかから抽出された、妊娠期・分娩期・育児期の母親が必要としている支援内容をいう。

Ⅲ．研究方法

Ａ．対象者

東北地方のＡ市Ｂ市および近畿地方のＣ市に在住している、正常な妊娠・分娩・産褥の経過をたどった16歳から22歳の初産婦のみ８名。

Ｂ．データ収集方法

初産婦８名に対して、妊娠期に１～３回、産褥入院中、産後１ヵ月目に各1回、半構成的面接を実施した。その内容は各期における現在の自分自身のこと、胎児または子供への思い、生育暦に関すること、両親との関係、夫との関係、友人との関係等である。インタビューの内容は、承諾を得てMDレコーダーに録音した。

Ｃ．データ分析方法

MDレコーダーに収録した内容を逐語録に起こし、妊娠期・分娩期・育児期の思いに関する文脈から意味可能な最小単位の文節を取り出し、それを基本データとした。これらの基本データを類似性と差異性を明らかにしながら意味単位ごとの小カテゴリーに分類し、それらをさらに関連するもの毎にまとめ、若年妊婦の母親への成長を示すラベルを付け、妊産褥婦のケアニーズとして表現した。

Ｄ．データ収集期間：2005年９月～2006年３月

Ｅ．倫理的配慮

青森県立保健大学の倫理委員会の承諾を受けた後に研究を実施した。研究への参加は、インタビューを始める前に研究の目的と方法および得られたデータの管理・発表方法、また研究途中での参加辞退も可能であること等について口頭と文書で十分説明し、同意を得た。

Ⅳ．結果

Ａ．対象の概要

対象者の平均年齢は19.25歳（16歳から22歳）であった。対象者の夫（パートナー）の年齢の平均は22.28歳で、妊娠期の婚姻状況は、４名が入籍しており４名は未入籍であった（内１名は入籍前にパートナーが死亡している）。また、入籍している４名はいずれも妊娠後入籍していた。妊娠期の家族構成および職業の有無は､核家族が４名、複合家族は４名であった。また、有職者は１名のみで他７名は無職であった。

Ｂ．妊娠期・分娩期・育児期の女性のケアニーズ

妊娠期、分娩期、育児期の女性のケアニーズは表１～３に示したとおりで、妊娠期８、分娩期６、育児期は８のケアニーズに分類された。なお、基本データは「　」、小カテゴリーは【　】、研究者が補足した内容は（　）で示した。

1．妊娠期のケアニーズ（表1）

a．妊娠を受容する

このカテゴリーは、妊婦自身やパートナー、両親がそれぞれ妊娠を受け入れていく過程におけるニーズであり、【妊婦が妊娠を受容する】【パートナーが妊娠を受容する】【両親が妊娠を受容する】の3つの小カテゴリーから構成されている。妊婦は妊娠を知って「すごく嬉しかった」と話し、パートナーに対しては「付き合ってる人がどう思うかなって」と不安を抱きつつ「産もうかって自然になったから嬉しかった」と語っていた。また親に対しては「どう言おうかなってすごい迷って」いたと話していた。

b．妊娠中の生活を整える

このカテゴリーは、妊婦が不安や辛さを抱えつつも、妊娠している今の生活に適応したり今後の準備を進めていく過程におけるニーズであり、【妊娠による身体的変化に対応する】【妊娠による精神的変化に適応する】【胎児のために生活を調整し適応する】【経済的な準備を整える】【妊娠・分娩・育児の知識を得る】の5つの小カテゴリーから構成されている。妊婦は妊娠が経過するにつれて身体が重くなってきたり、「ちょっと落ち込みやすくなった」りしてきたと自覚していた。また「(妊娠が)分かったときにはタバコをすぐやめて」いたり、「たまに無茶とか騒ぎたいなっていうのはあるけど」我慢できると語っていた。経済的な問題に対しては夫が貯金してくれていることに感謝したり、母親学級で分娩室を見学するなど分娩や育児についての情報を得ようと努力していた。

c．胎児への関心を高める

このカテゴリーは、妊婦自身がパートナーと共に胎児への関心を高めていきたいというニーズであり、【妊婦の胎児への関心を高める】【パートナーの胎児への関心を高める】の2つの小カテゴリーから構成されている。妊婦は胎児に対して「とりあえず元気に育ってくれたらいい」と思い、パートナーに対しては「名前も本見て考えとるみたい」と関心を持ってくれていることを嬉しいと感じていた。

d．親意識を高める

このカテゴリーは、親になるという自覚へのニーズであり、【理想の親像をもつ】【親になる不安に対処する】【妊婦の役割行動を遂行する】【胎児との愛着を形成する】の4つの小カテゴリーから構成されている。妊婦は「とりあえずは常識がある子」に育って欲しいと願う一方で自分は親になれるのだろうかという不安ももっていた。また「必要な物いろいろそろえとかないとね」と分娩や育児用品を準備することへの意欲を示し、「自分も苦しいから、多分（胎児も）苦しいよね」と胎児を気遣う言葉を語っていた。

e．分娩に対する準備を整える

このカテゴリーは、分娩への心構えをしていく過程におけるニーズであり、【分娩への準備を整える】【分娩への不安に対処する】の2つの小カテゴリーで構成されている。妊婦は「産むときの不安が大きくて」と話しながらも、「ヒーヒーフーってやるんだよね？」と呼吸法等の分娩のための準備について確認をしていた。

f．夫（パートナー）と新たな関係を築く

このカテゴリーは、夫婦として、親になるものとして、パートナーと新たな関係を築いていきたいというニーズであり、【夫婦としての関係を築く】【パートナーが父親になることを支援する】の2つの小カテゴリーから構成されている。妊婦は「やっぱり相談して、主となることは2人で結局決めていかなければいけないって」と語り、パートナーに対しては「多分向こう（夫）は向こうなりにちゃんとそういう心構えとかしてると思う」と語っていた。

g．両親（家族）との関係を調整する

このカテゴリーは、双方の親との新たな関係を築いていくことに対するニーズであり、【パートナーの両親との関係を築く】【家族からのサポートを得る】の2つの小カテゴリーから構成されている。妊婦は両親が「妊娠に気づいてからすごく気を使ってくれて」と食事のことや身体を気遣ってくれることに嬉しく感じている一方で、「相手の親が初めにすごい反対して」とパートナーの両親との関係に不安を抱いていた。

h．友人や近隣者との関係を調整する

このカテゴリーは、家族以外の人達との交流を期待するニーズであり、【家族以外のサポートを得る】【母親同士のネットワークをもつ】の2つの小カテゴリーから構成されている。妊婦は「ストレスたまってると話も聞いてくれる」友人がおり、近所の人が「妊娠のことを知っていて協力し

表１．妊娠期のケアニーズと基本データ

妊娠期のケアニーズ		基本データ
大カテゴリー	小カテゴリー	
a 妊娠を受容する	①妊婦が妊娠を受容する	「（妊娠を知って）すごく嬉しかった」「お腹の中にいるんだなーと思う」
	②パートナーが妊娠を受容する	「付き合ってる人がどう思うかなって」「産もうかって自然になったから嬉しかった」
	③両親が妊娠を受容する	「親にどう言おうかなってすごい迷って」「（パートナーは）どう説明したらいいかわからんかったと思う」
b 妊娠中の生活を整える	①妊娠による身体的変化に適応する	「（身体が）重たいことは重たいです」「もうちょっとお腹が出るかなと思ってて」「人と比べて小さいかなと思う」
	②妊娠による精神的変化に適応する	「なんか落ち込みやすくなったような気はします」「気持ちがブルー入ったりはします」「喧嘩とかでも、なんかすごい自分を責めたりして」
	③胎児のために生活を調整し適応する	「たまに無茶とか騒ぎたいなっていうのはあるけど、そういう我慢は苦にならない」「（妊娠が）分かったときにはタバコすぐやめて」
	④経済的な準備を整える	「18歳になったら就職しろと親に言われている」「（夫は）お金とかも貯めてくれたりとか（してる）」
	⑤妊娠・分娩・育児の知識を得る	「本を読むのは結構一杯買っていろいろ読んだりとかはしてます」「（母親学級で）産むとこ（分娩室）とか見学させてもらって」
c 胎児への関心を高める	①妊婦の胎児への関心を高める	「とりあえず元気に育ってくれたらいい」「一応育ってるんだなって」
	②パートナーの胎児への関心を高める	「今一番遊びたい時期やし、協力してって言っても難しい」「名前も本見て考えとるみたい」「（胎動）気持ち悪いって」
d 親意識を高める	①理想の親像をもつ	「友達みたいな親は良くないって言ってるけど、うちはそれでもいいと思う」「とりあえずは常識がある子ってというか、したいなって」
	②親になる不安に対処する	「今の自分はほんとに親になれるか分からない状態」「子供のしつけも全部自分でしなさいと言われている」
	③妊婦の役割行動を遂行する	「必要な物いろいろそろえとかないとね」「前はえーやるの？っていう感じだったんですけど、今はあーやんなきゃって」
	④胎児との愛着を形成する	「赤ちゃんがつぶれたらどうしようって」「自分が苦しいから、多分中身（胎児）も苦しいよなって」「（胎児が）動くたびに生きてるなーって」
e 分娩に対する準備を整える	①分娩への準備を整える	「練習？ヒーヒーフーってやるんだよね」「ちょっと歩けばお腹張るし、運動不足」
	②分娩への不安に対処する	「産む時の不安が大きくて」「どうしていいんかわからなくて、やっぱり看護師さんとかに頼ってしまうと思うんですけど」
f 夫（パートナー）と新たな関係を築く	①夫婦としての関係を築く	「喧嘩しても結婚してしまったら逃げることもできないし」「やっぱり相談して、主となることは２人で結局決めていかなければいけないって」「周りからアドバイスはもらっても決めるのは私たち」
	②パートナーが父親になることを支援する	「出産の本とか子育ての本とか買ってくると、今読んだんだけどなってぶつぶつ言っとる」「（夫と子育てについての）特に話はしていない」「多分向こう（夫）は向こうなりにちゃんとそういう心構えとかしてると思う」
g 両親（家族）との関係を調整する	①パートナーの両親との関係を築く	「相手の親が初めにすごい反対して」「まだそんなに若いのに育てられるわけないとか言われてて」
	②家族からのサポートを得る	「ご飯のこととか、何食べないと、これ食べないととか」「お父さんは何か、暖かくしろとか」「妊娠に気づいてからすごく気を使ってくれて」「祖母は子供が生まれて自分が動けない間、手伝ってくれると言っている」
h 友人や近隣者との関係を調整する	①家族以外のサポートを得る	「ストレスたまってると話も聞いてくれる（友人がいる）」「（近所のおばさんは）妊娠のことを知っていて協力してくれる」
	②母親同士のネットワークをもつ	「この歳で母親になるってあまりいない」「（近くに先輩ママとか）全然いない」

てくれる」ことを心強く感じていた。また近くに同じような母親がいないと語っており、悩みなどが共有できる場を求めていた。

２．分娩期のケアニーズ（表２）

ａ．分娩時の心理的サポートを得る

このカテゴリーは、分娩の不安や緊張を軽減し、分娩をスムーズに進行させるためのニーズであり、【一人でいる不安に対処する】【 実母の心理的サポートを得る】【夫の心理的サポートを得る】【助産師の心理的サポートを得る】【身内以外の人へ対応する】の５つの小カテゴリーから構成される。産婦は分娩時に先の見えない不安を抱え「１人だと不安」と話し、「母親がずっとそばにいてくれたことが励みになっていた」と語っていた。また、助産師に対しては、「あー痛いよね、痛いんだよね」と気持ちを分かってもらえたという信頼感を語っている。しかし、「でもやっぱり身内じゃないと嫌かな」と言い、気を使わなくても良

表２．分娩期のケアニーズと基本データ

分娩期のケアニーズ		基本データ
大カテゴリー	小カテゴリー	
a 分娩時の心理的サポートを得る	①一人でいる不安に対処する	「分娩のときは1人だと不安になるので誰かにいて欲しい」
	②実母の心理的サポートを得る	「母親がずっとそばにいてくれたことが励みになっていた」「（実母がいてくれたら）やっぱり心強いかなって」
	③夫の心理的サポートを得る	「（夫と）陣痛室はずーと一緒でした」「（夫は）とりあえず話しかけてくれたのと、背中さすってくれたのと、子どもも頑張ってるから頑張ろうねって行ってくれたんですけど」
	④助産師の心理的サポートを得る	「あんまり、ちょくちょく見に来てくれて」「助産師さんがずっと付き添って欲しかったなって言うのはあります」「あー痛いよね、痛いんだよねとかっていう、痛いんだっていう（気持ちを分かってくれた）」「一応モニターとかも配慮してくれて、取りずらかったと思うんですけどー」
	⑤身内以外の人へ対応する	「経験者だから分かってもらえるっていうのはあるんで、でもやっぱり身内じゃないと嫌かな」「苦しんでいるところ、あんまり恥ずかしいっているのがあるんで」
b 分娩時の身体的サポートを得る	①分娩中の痛みに対応する	「痛さに耐えられず大泣きしていた」「陣痛室はだれもいなかったので、ぎゃーっと叫んで大騒ぎした」「痛かった。飲み薬とバルン」「それをする（メトロの挿入）と思っていなくて、そんな早い段階で、ちょっとあっ痛いと思った」
	②実母から身体的なサポートを得る	「（実母に）痛すぎて背中さすってもらったりとか、お茶のましてもらったりとか」「あんまり記憶に無いんですけど、やっぱりさすってもらったりとか。」
	③助産師から身体的なサポートを得る	「（助産師は）カイロも貼ってくれたり、定期的に見に来てくれたし、ずっと夜中さすってくれたし」「助産師さんは背中をさすってくれたことは覚えている」
	④夫から身体的サポートを得る	「（夫は）なんか、うろうろ、なんかすることがなかったと思う、たぶん」「（夫の出番は）うん、なかった、終始なかった」
c 分娩体験の満足感をもつ	①無事に生まれたことに安堵する	「ちゃんと無事なんやと思って、なんかよく仮死状態とかいろいろ聞くけど、ちゃんと生まれたっぽいって思ってとりあえず良かったって思って」「ちゃんと無事なんやと思って、なんかよく仮死状態とかいろいろ聞くけど、ちゃんと産まれたっぽいって思ってとりあえず良かった」「えーっとね、普通感動するもんだんだろうけど、やっと出たって気持ちでした」
	②夫が感謝の気持ちを表す	「よく頑張ったねって」
	④バースプランを実施する	「バースプラン、一応妹の立会いだけだったんだけど、臍の緒（の切断）は旦那で、であと生まれたときにビデオ録りたい」「先生、ビデオ、ビデオって指示してて、バースプラン見てて、多分ビデオ頭にあった」
d 医学的介入の必要性を理解する	①分娩誘発の情報を得る	「別にそこまで、そんなに、怖いっていうのもんでもなさそうやったし」「たまごクラブとか読んで、誘発したって人とか書いとって、けっこう多いから、まあそれでもいいかなとおもって」
	②医師の説明を理解する	「帝王切開では、うん。別に怖いとかはないし、手術中はとりあえず目を開けるのに必死だったかな」「うん、なにがどうなっとるか、どこ切るとか聞いてなかったから、どこが開いとんやろって思ったけど、前もって今からちょこっと揺れるからとか言われとったから、別に変なことが起こってるんじゃないなって」
e 医学的介入の自己決定をする	①分娩誘発の決定に参加する	「自分としてはお腹がすごい大きかったし、しんどかったから、もう出てきてくれって」「もう身体がしんどかったから、うん生まれてきてくれたほうが、ありがたいと思った」
	②帝王切開術の決定に参加する	「どうしても1本目の麻酔が切れたんかなんかで効かなくなってきて」「もう嫌だと思って先生にわざわざ来てもらった」「（手術を）うん、もうしてくれと思った」
f 分娩時に自由に気持ちを伝える	①助産師等への気兼ねに対応する	「うん、やっぱり気を使うっていうか、腰さすってくれとるときに、助産師さんがうとうとこう寝とって、ああしんどいんやろなって思って」「自分的に生まれるときに、看護婦さんとかって、もうちょっと我慢しなさいくらいの感じだと思ってたけど、全然、うん、優しい感じ」
	②実母の疲労に配慮する	「やっぱりまあ、お母さんも年やし、やっぱりしんどいやろし」「もうしんどいやろなと思ったから」

い身内に傍にいて気持を支えて欲しいという期待を抱いていた。

b．分娩時の身体的サポートを得る

このカテゴリーは、分娩時の体力の消耗を最小限にし、児娩出時に最大の力を発揮するためのニーズであり、【分娩中の痛みに対応する】【実母から身体的サポートを得る】【助産師から身体的サポートを得る】【夫から身体的サポートを得る】の4つの小カテゴリーから構成されている。産婦は陣痛や医療処置のため、今まで体験したことのない痛みにどう対処したらよいのか分からず、「痛さに耐えられず大泣きしていた」。その陣痛の痛みに対して、「（夫の出番は）なかった、終始なかった」と話し、実母や助産師には「背中をさすっ

たり、お茶を飲ませてもらったり」などしてくれたと語っていた。

c．分娩体験の満足感をもつ

このカテゴリーは、分娩体験の記憶を肯定的なものにするケアニーズであり、【無事に生まれたことに安堵する】【夫が感謝の気持ちを表す】【バースプランを実施する】の3つの小カテゴリーで構成されている。産婦は無事児を出産し、「ちゃんと無事なんやと思って」「とりあえず良かったと思い」と安堵していた。また夫からも「よく頑張ったね」と労いの言葉をかけてもらい、「ビデオを撮りたい」という希望もかなったと語っていた。

d．医学的介入の必要性を理解する

このカテゴリーは、医学的介入時の自己決定を支えるためのニーズであり、【分娩誘発の情報を得る】【医師の説明を理解する】の2つの小カテゴリーから構成されている。産婦は、「“たまごクラブ”とか読んで」、「帝王切開では、別に怖いとかはない」「前もって今から（ベッドが）ちょこっと揺れるからとか言われとったから、別に変なことが起こってるんじゃないなって」と語り、育児雑誌や医師の説明から、自分なりに医学的介入の必要性を理解していた。

e．医学的介入の自己決定をする

このカテゴリーは、医学的介入が必要な状況になったときにも、産婦が主体的に分娩に望むことを支えるニーズであり、【分娩誘発の決定に参加する】【帝王切開術の決定に参加する】の2つの小カテゴリーから構成されている。

産婦は「自分としてはお腹がすごい大きかったし、しんどかったから、もう出てきてくれって」「もう嫌だと思って先生にわざわざ来てもらった」と、自分の身体の限界を感じ、「（手術の話は）うん、もうしてくれと思った」と医学的介入の決定に関わっていた。

f．分娩時に自由に気持ちを伝える

このカテゴリーは、分娩時に回りに気を使うことなく安楽に過ごすためのニーズであり、【助産師等への気兼ねに対応する】【実母の疲労に配慮する】の2つの小カテゴリーから構成されている。産婦は「やっぱり気を使うっていうか」「お母さんも年やし、やっぱりしんどいやろし」と語り、実母や助産師の疲労に気を使っていた。しかし、「自分的に、生まれるときに看護婦さんとかって、もうちょっと我慢しなさいくらいの感じだと思ってたけど、全然、優しい感じ」と、看護師が自分が思い描いていた印象と違ったことを話していた。

3．育児期のケアニーズ（表3）

a．親としての自覚を高める

このケアニーズは、親役割りを獲得していく過程におけるニーズであり、【親としての自覚をもつ】【理想の親像のイメージがある】【親役割の遂行に向けて自分の行動を変容させる】【親になることを受容する】の4つの小カテゴリーから構成されている。褥婦は、「（母親の実感は）まだ、ないって言えばないんですけど」と話しているが、「自分のお母さんみたいなのが一番だけど、逆に（赤ちゃんから見て）そう思えるような、お母さんになりたい」と理想の親像を持っており、「自分より子ども優先」「（親としてできることは）とりあえず女の子やから、顔には傷をつけないように爪は切ろうと思ってる」と親として子どものことを考え、自分の行動を変容させ、「こっからまた、違うって感じ母親になるって」と親になることを受容していた。

b．子どもとの関係を築く

このケアニーズは、子どもを家庭の一員として受け入れていく過程でのニーズであり、【子どもへの絆を形成する】【夫の子どもへの絆形成を支援する】【祖父母と孫の関係を調整する】の3つの小カテゴリーから構成されている。褥婦は、「顔見ていたら嬉しくなります」と子どもに愛情を感じ、「指とかすんごい握るから、ビックリした」と子どもの能力に驚いたり、「（子どもと）やっぱ、一緒に出て歩けるとか、言葉しゃべるのとか（楽しみ）」と子どもとの関係を楽しみにしている一方夫がまだ子どもと十分に絆を深めていないと感じている。また祖父母と孫の関係を驚きと嬉しい気持で見守っていた。

c．育児のサポートを得る

このカテゴリーは、育児をしていく上での困難に対して周囲のサポートを得、克服していくためのニーズであり、【睡眠不足に対応する】【実母（実家）のサポートを得る】【夫の育児参加を促す】【外出時のサポートを得る】【友人のサポートを得る】【社会資源を活用する】の6つの小カテゴリーから構成されている。褥婦は、「最初は、（夜）寝れ

表３．育児期のケアニーズと基本データ

育児期のケアニーズ 大カテゴリー	小カテゴリー	基本データ
a 親としての自覚を高める	①親としての自覚をもつ	「（母親の実感は）まだ、ないって言えばないんですけど」「まだ、親な気がしない」「なんか、あんまりまだそんな実感というのはなくて」
	②理想の親像のイメージがある	「自分のお母さんみたいなのが一番だけど、逆に（赤ちゃんから見て）そう思えるような、お母さんになりたいって思う」「ねちねちしないように（なった）。多分（子どもが）こう気づいてれば嫌だなって思う」
	③親役割の遂行に向けて自分の行動を変容させる	「自分より子ども優先」「（お金は）この子に使おうと思って、別に自分の服はいいかと思うようになった」「（親としてできることは）とりあえず女の子やから、顔には傷をつけないように爪は切ろうと思ってる」「将来っていったらあれやけど、何かきちんとお金のこととかそういうのは考えるようになった」「そういう学校のお金とかかかるやろうから、ちゃんと維持を考えつつ」「家が、禁煙になっちゃったから、子どもがいなくても、洗濯物干してるから」「散らかす癖があるから、自分で。多分床に物置いたりとか。でも一切出来なくなるから、赤ちゃん大きくなると。毎日掃除できるかな」
	④親になることを受容する	「変わりめって言うか、一生の中で一番」「こっからまた、違うって感じ母親になるって」
b 子どもとの関係を築く	①子どもへの絆を形成する	「顔見ていたら嬉しくなります」「顔のこととか心配やったけど、可愛いかしらとか、でもまあまあ可愛いいし、いいんじゃんみたいな」「（名前の候補を）出し合いながら、ふと○○は？ってあたしが言って、いいんでねぇ」「指とかすんごい握るから、ビックリした」「最近ちょっと笑うようになったかなと思う」「女の子でかわいらしくね。育ってくれたらなって」「（子どもと）やっぱ、一緒に出て歩けるとか、言葉しゃべるのとか（楽しみ）」
	②夫の子どもへの絆形成を支援する	「まだね1週間に1回しか会ってないし、抱いてる回数もそんなにないから」「初めてなんで、どうしたらいい？って感じでしたね」
	③祖父母と孫の関係を調整する	「お父さんもどうやって電話かけてきたりとかするし、なんか意外っていうか」
c 育児のサポートを得る	①睡眠不足に対応する	「（夜眠れなくて）最近はだんだんイライラしてきてダメなんですけど」「最初は、（夜）寝れなくてどうしようと思った」
	②実母（実家）のサポートを得る	「お母さんいないとやっていけへんって感じで」「これからも世話してもらうはんでって思って、大変だけど頑張って、お願いします」
	③夫の育児参加を促す	「（夫は）○○ちゃんのお世話はお風呂だけ」「うちがおらんときに頼むわって、で泣いたりしたときに（オムツを）替えたけど泣き止まへんとか、ぶつぶついって、替えられるのは、替えられるっぽい」
	④外出時のサポートを得る	「外に行くときの不便さはすごい感じるけど、全部荷物持っていかなあかんし」
	⑤友人のサポートを得る	「他の母親の話を聞いて、自分と同じ体験をしているなと思う」「あの子のお下がり全部もらったし、だから楽やった」「近くに頼れる人いるっていうのもあるし、みんな（友達）やってこれてるからできるかな」
	⑥社会資源を活用する	「産後2回保健師が訪問してくれた」「今一番分からへんのが予防接種」
d 育児の不安に対処する	①子どもの異常に対処する	「やっぱり何が普通なのかが初めてやから、分からへんから」「本当になんで泣いているのか未だに分からないときがある」
e 育児技術を獲得する	①育児技術の不足を認識する	「子育てに早く慣れたかったので、母子同室にしてもらい子どもの世話をした」「入院中に一緒やないと帰ってから困るやろなっていうのはあった」「できれば一緒のほうがよかったかな」「鼻の掃除とか教えてもらってないんで、ちょっとこわいですね」「もっとそういうとこは教えて欲しかったなって」「やっぱりもうちょっと仕方って言うか、授乳の仕方とか」
	②他の母親との違いを認識する	「産後は授乳のときに同じ部屋の人が経産婦さんだったんで、結構母乳が出てたんですね。でも自分はあんまり出てなくて結構不安になっちゃて」
	③子どもの要求に対応する	「最近そうなってきた。ぐずってくる。人覚えてきたっていうか」「毎日見てれば全然。毎日、寝方も違うし、泣き方も、泣き方でもだいたい分かって」
f 産後の生活を整える	①マイナートラブルに対応する	「お尻痛いって言ってたじゃないですか、そしたら尾骨がずれてた」「お産後退院する頃から骨盤の痛みがあった」
	② 気分転換を図るための調整をする	「多分ストレス、多分家に閉じこもりっぱなし」「ちょっと友だちと出歩いた次の日は気分が違う」「（友達と会った後は）やけに育児やろうって気になってるから」
	③職場復帰の準備を整える	「職場復帰が４月めどにしてるから、３月中には帰らないといけないんだよなって」
g 夫との絆を深める	①親としての関係を築く	「（夫は）すごい結構抱いてくれるし、見てくれるし。やるよって言ってくれる」「泣いても抱っことかするの怖いって言ってたけど、全然抱っこしたがるし」「おむつ取り替えたがるし」「オシャレして二人で出歩くことはないんだな」「旦那と２人で、１人増えて、で、どう変わるんだろうっては、ずっと思ってた」
	②実家の両親と夫の関係を調整する	「（両親の支援は嬉しい）って、思う反面、なんか旦那がかわいそうかなって」「実家に戻ってくれば、お父さんお母さんって孫かわいくてしょうがないから、パパに何もやらせないっていうか」
h 両親との絆を深める	①実家の両親との新たな関係を築く	「（赤ちゃんが来て）多分家の人が仲良くなったと思う」「お互い赤ちゃん見てて、満足して何ていうか変にイライラしない」「（家族は）やっぱ一番やってくれたのかなって」
	③夫の家族との新たな関係を築く	「今は実家だからいいけど、帰ったらやること増えるよなーと思って」「まあ、同居って大変だよね」

なくてどうしようと思った」と初めの育児に戸惑いながらも、「お母さんいないとやっていけへんって感じで」実母の支援に助けられていた。また「(夫は)○○ちゃんのお世話はお風呂だけ」は入れてくれ、「他の母親の話を聞いて、自分と同じ体験をしているなと思う」など周囲の人からも支えられていたが、外出のときは1人で出かけることの困難さも感じていた。褥婦は育児をしていく過程で、睡眠不足や外出時の不便さを感じながらも、周囲の支援を受け親の役割を遂行していた。

d．育児不安に対処する

このカテゴリーは、子供の異変に早期に対処し、子供の健康を守るという親としての基本的な役割を獲得するためのニーズであり、【子どもの異常に対処する】という1つの小カテゴリーからなる。褥婦は、子どもの正常な反応と異常な症状の違いが分からず、「やっぱり何が普通なのかが初めてやから、分からへんから」「本当になんで泣いているのか未だに分からないときがある」と不安を感じていた。

e．育児技術を獲得する

このカテゴリーは、親役割を引き受けていく過程において重要なニーズであり、【育児技術の不足を認識する】【他の母親との違いを認識する】【子どもの要求に対応する】の3つの小カテゴリーから構成されている。褥婦は、「子育てに早く慣れたかった」「入院中に一緒やないと帰ってから困る」と自分達が育児に不慣れであることを認識しており、「やっぱりもうちょっと仕方っていうか、授乳の仕方とか」と具体的な育児の方法を知りたがっていた。また、「産後は授乳の時に同じ部屋の人が経産婦さんだったんで、結構母乳が出てたんですね。でも自分はあんまり出てなくて結構不安になっちゃて」と他の母親と自分を比較し不安を覚えている。しかし、「毎日見てれば全然。毎日、寝方も違うし、泣き方も、泣き方でもだいたい分かって」と育児に対する自信も見えてきており、育児技術を獲得することに前向きに取り組んでいた。

f．産後の生活を整える

このカテゴリーは、家族の一員に子どもが加わり、スムーズに新しい生活を始めるためのニーズであり、【マイナートラブルに対応する】【気分転換を図るための調整をする】【職場復帰の準備を整える】の3つの小カテゴリーから構成される。褥婦は分娩によって生じた「お尻の痛み」「骨盤の痛み」などに悩まされている。また、産後外出の機会が減ったため、「多分ストレス、多分家に閉じこもりっぱなし」とストレスを抱えていた。そんななか、「職場復帰を4月めどにしてるから、3月中には(実家から嫁ぎ先へ)帰らないといけない」と職場復帰の準備についても語っていた。

g．夫との絆を深める

このカテゴリーは、養育期としての家族の発達段階の課題を達成するためのニーズであり、【親としての関係を築く】【実家の両親と夫の関係を調整する】の2つの小カテゴリーから構成されている。褥婦は「(夫は)すごい結構抱いてくれるし、見てくれるし。やるよって言ってくれる」と一緒に育児をしてくれることを頼もしく感じているが、半面「オシャレして二人で出歩くことはないんだな」「旦那と2人で、1人増えて、で、どう変わるんだろうっては、ずっと思ってた」と、親となった自分達夫婦の関係がどのように変わっていくのだろうかと不安に思っていた。

さらに、実家の両親と夫との関係について「実家に戻ってくれば、お父さんお母さんって孫かわいくてしょうがないから、パパに何もやらせないっていうか」と夫の気持ちを思いやり、気を使っていた。

h．両親との絆を深める

このカテゴリーは、親となった自分たち夫婦と、それぞれの実家の両親との新たな関係を構築していくためのニーズであり、【実家の両親との新たな関係を築く】【夫の家族との新たな関係を築く】の2つの小カテゴリーから構成されている。褥婦は「(赤ちゃんが実家に来て)多分家の人が仲良くなったと思う」と、子どもが生まれたことによって、実家の実母と祖母が仲良くなったと話し、子どもが家族の一員として受け入れられていることを感じている。また実家の両親に対して、「(両親は妊娠中から出産・育児までの間いろいろな支援を)やっぱ一番やってくれたのかなって」と感謝の気持ちをもっている。一方、「今は実家だからいいけど、帰ったらやること増えるよなーと思って」「まあ、同居って大変だよね」と、実家から嫁ぎ先へ戻り、新たに夫の家族との関係をつくっていくことへの不安な気持ちを話していた。

Ⅴ．考察

母親として成長するための、妊産褥婦のケアニーズには、妊婦自身のセルフケアによって満たされるもの、夫や実母など身近なサポートによって満たされるもの、助産師などの専門家のサポートによって満たされるものがある。しかし、ここではその人々以外の、家族ではなく、妊娠･分娩・育児とそのケアに関する一定の研修を受けた、非専門家のドゥーラが、満たすことのできるケアニーズに対する役割を考察する。

Ａ．傾聴する

妊娠期のケアニーズのうち、妊娠を受容する、胎児への関心を高める、分娩に対する準備を整える､夫（パートナー）と新たな関係を築く､両親（家族）との関係を調整する、また分娩期のニーズのうち、分娩時の心理的サポートを得る、分娩体験の満足感をもつ、産褥期のケアニーズのうち、親としての自覚を高める、子どもとの関係を築く、育児不安に対処する、夫との絆を深める、両親との絆を深めるというニーズを満たすために、非専門家であるドゥーラとしてできるケアには、『傾聴すること』があると考えられる。

Marcer（1986，p.61）は10代で妊娠した女性は情緒的問題や健康問題に対して鈍感で、あまり重視していないが、腹部の増大による生活制限をより重視していると述べている。本研究の若年妊婦は、そのほとんどが予期しない妊娠で、その後入籍、同居という経過をたどっている。４名に関しては、妊娠後も未入籍であった。若年妊婦は妊娠したことは｢（妊娠を知って）すごく嬉しかった｣と感じていたが、妊娠による身体的な変化やマイナートラブル｢（体が）重たいことは重たいです｣、または｢（妊娠が）分かったときにはタバコすぐやめて｣など行動の変容を余儀なくされ当惑していた。さらに、育児期には｢（子どもの）顔見てたら嬉しくなります｣と子どもを愛しいと思う反面、｢夜眠れなくてどうしようと思った｣と育児の困難さを感じたり、外出の不便さ、｢（家族が）１人増えてどうなるんだろう｣と夫や両親との新たな関係に漠然とした不安を感じており、妊娠期から育児期を通して､喜びと不安や当惑といった、相反する感情の間を行ったり来たりしているアンビバレンツな状態にあった。このような若年妊婦の悩みに対しては、妊婦の話に耳を傾ける機会を設け、妊婦のアンビバレンツな感情を引き出し、自分の関心事について素直に話すことができる環境を提供することが重要である。ドゥーラが研修によって傾聴することのトレーニングを受けているならば、妊娠中から分娩期・育児期を継続してじっくり話を聴くことができる。それによって、若年妊婦は、ありのままに尊重しつつ受け入れられているという実感をもつことができ、自己洞察を深めることができると考えられる。

Ｂ．傍にいて、ともに経験する

妊娠期のケアニーズである、妊娠中の生活を整える、親意識を高める、分娩に対する準備を整える、分娩期のケアニーズである、分娩時の心理的サポートを得る､分娩時の身体的サポートを得る、産褥期のケアニーズである、子どもとの関係を築く、育児のサポートを得る、育児技術を獲得する、産後の生活を整える、というニーズを満たすためにドゥーラができるケアには､『傍にいて、ともに経験する』があると考えられる。

10代女性は年長の女性よりも分娩体験を否定的に捉える傾向があり、これは精神的な準備不足と出産に関する知識不足や、過去の苦痛体験の少なさが反映しているといわれている（Marcer，1986，p.79）。若年妊婦たちは｢分娩のときは一人だと不安になるので誰かにいてほしい｣と話していた。助産師は呼吸法を指導したり、産痛緩和を一緒に行ったりするが、継続して患者の傍にいることは困難である。ドゥーラは非専門家であるが、妊産褥婦のケアをするために、産痛緩和法、リラックス法などは自身の体験を参考にできることに加えて、研修を受けることによって、一緒に実施することができる役割であると思われる。またドゥーラは、専門家とは異なり、継続して患者の傍にいることができるという長所がある。

このようなドゥーラが身近にいることにより、分娩を初めて体験する若年妊婦が、分娩体験を肯定的に受けとめ、自尊心を高めることへの助けとなると考える。

また、若年妊婦は妊娠期から育児期において、母親役割を獲得するための様々な体験をする中で、｢やっぱり何が普通なのか、分からへんから｣

ちょっとしたことを、気軽に聞ける存在を求めていた。ドゥーラは出産経験のある女性であり、妊娠期には妊娠中の生活のアドバイスや出産準備を一緒に行い、育児期には育児技術を伝達するなど、継続的に支援の手を差し伸べることができる。これにより、ドゥーラは、周囲に子育てをしている女性に出会う機会の少ない母親たちにとって、役割モデルとなることができると考える。

C．支持し、励まし賞賛する

妊娠期のケアニーズのうち、妊娠中の生活を整える、胎児への関心を高める、分娩に対する準備を整える、分娩期のケアニーズのうち、分娩時の心理的サポートを得る、分娩時の身体的サポートを得る、分娩体験の満足感をもつ、産褥期のケアニーズのうち、親としての自覚を高める、育児不安に対処する、育児技術を獲得するというニーズを満たすためにドゥーラができるケアには、『指示し、励まし賞賛する』があると思われる。

女性は、受胎を契機にもろもろのストレスを体験し、それに反応している（和田，1990，p.9）。若年妊婦は「たまには無茶したり遊びたいなっていうのはある」と、生活習慣や食生活の変容を余儀なくされたり、腹部の増大による行動の制限などにストレスを多く感じる傾向がある。このストレスが、母親役割を獲得していく過程に障害となる可能性がある。Joanne（2002，15）は、精神的に支えてくれる女性がそばにいることで、出産前から出産を経て出産後まで、母親はこれらのプロセスを経ている間安心し、自尊心を構築していき、不安やうつ状態が減ると述べている。若年妊婦への支援には、このように自分を支持し、認めてくれる存在が傍にいることが非常に重要であると考える。病院の助産師らは、時間的にも人数的にも一人の患者にじっくり関わることが困難である。ドゥーラが、妊娠期から育児期まで１対１で継続的に関わっていくことができるならば、若年妊婦のストレスを緩和し、自己肯定感を高めるための支援が提供できると考えられる。

D．他者との関係を調整する

妊娠期のケアニーズである、妊娠を受容する、妊娠中の生活を整える、親意識を高める、分娩に対する準備を整える、夫（パートナー）との新たな関係を築く、両親（家族）との関係を調整する、友人や近隣者との関係を調整する、分娩期のケアニーズである、分娩時の心理的サポートを得る、分娩時の身体的サポートを得る、医学的介入の必要性を理解する、医学的介入の自己決定をする、産褥期のケアニーズである、育児のサポートを得る、夫との絆を深める、両親との絆を深めるというニーズを満たすためにドゥーラができるケアには、（他者との関係を調整する）があると思われる。ここでは、特に母親、夫、医療従事者との調整について考察する。

１．母親との調整

核家族化、コミュニティの崩壊、少子化という社会的な流れの中で、親が子どもを育てているモデルはことごとく失われてしまい、親となる人は孤立している。（大久保，2000，p.10）。そのために、実際に妊婦がモデルとする母親像は身近であった実母であることが多く、実母が妊婦に与える影響は大きい（安森，喜多，2002，p.30）と言われている。思春期は、家族に依存する状態から、自分自身をいい意味で引き離し、親離れをしていく時期にある（吉沢，2000，p.43）。しかし、若年妊婦は「まだ、親な気がしない」と話し、親離れが完了する前に母親役割を担わなければならず、一方、「親にどう言おうかなってすごく迷って」と述べているように、妊婦の母親も娘の予期しない妊娠という出来事を受け入れなければならない状況に直面する。ドゥーラは出産経験があり、すでに母親役割を習得している人である。従って、若年妊婦と母親が新たな母娘関係を構築していくまでの間、妊婦に対しては母親的役割、母親に対しては妊娠した娘を受け入れ支援していけるように関わることができると考えられる。

２．夫との調整

森岡の家族周期の８段階においては、新婚期は夫婦としての相互の理解を深めて、絆を築くという発達課題がある。また養育期では第１子の出生によって新しい親としての役割を自覚し、保育という役割行動を習得しなければならない時期である（鈴木・渡辺，1999，p.38）。しかし、若年妊婦は自分のアイデンティティを確立していくと同時に、「喧嘩しても結婚してしまったら逃げることもできない」と結婚に対する責任を感じ、さらに「（子どもは）とりあえず元気に育ってくれた

らいい」と育児の方針を考えるなど、新婚期と養育期の課題も同時に習得しなければならないという状況にある。パートナーもまた、同様に複数の役割を同時に習得していかなければならないが、若年妊婦は「（夫は）今、一番遊びたい時期やし、協力って言っても難しい」と、夫婦としてまたは親としての二人の気持ちの間に距離があると感じていた。このような状況にある若年妊婦とパートナーが適切な支援を得られない場合、短期間で離婚していくケースも多い。自らもパートナーと新たな絆を結び、家庭を築いてきたドゥーラが、妊娠期から分娩期・育児期と継続して若年妊婦のカップルと一緒に過ごし、客観的な立場で妊婦とパートナー双方の意見を聞くことができるならば、若年妊婦が妊娠・分娩・育児を経験しながら自らのアイデンティティを確立し、パートナーと新たな家族を築くという課題を達成していくことができると考えられる。

３．医療従事者との調整

患者が医療者から提示される検査や治療について適切に判断し、自己決定をしていくためには、患者と医療者の良好な人間関係の形成が不可欠である。しかし、経験のない若年妊婦は「（助産師に）やっぱり気を使うって言うか」と遠慮や気兼ねをしており、医療従事者である産科医師や助産師と良好な関係を形成していくために支援することは重要である。さらに、分娩期は陣痛による苦痛も大きく、「（陣痛が辛くて）もう（手術を）してくれと思った」などと話しており、若年妊婦が余裕を持って医療従事者と関わることは困難であると思われる。そのような時に出産経験があり、妊婦と継続的に関わることのできるドゥーラが傍にいるならば、妊婦が希望や要望を自分で伝えられるよう支援したり、時に妊婦の代弁することにより、妊婦と医療従事者との関係形成に貢献できると考えられる。

Ⅵ．結論

本研究により、以下のことが明らかになった。

Ａ．若年妊婦のニーズには、１．妊娠期：ａ．妊娠を受容するｂ．妊娠中の生活を整えるｃ．胎児への関心を高めるｄ．親意識を高めるｅ．分娩に対する準備を整えるｆ．夫（パートナー）と新たな関係を築くｇ．両親（家族）との関係を調整するｈ．友人や近隣者との関係を調整する２．分娩期：ａ．分娩時の心理的サポートを得るｂ．分娩時の身体的サポートを得るｃ．分娩体験の満足感をもつｄ．医学的介入の必要性を理解するｅ．医学的介入の自己決定をするｆ．分娩時に自由に気持ちを伝える３．育児期：ａ．親としての自覚を高めるｂ．子どもとの関係を築くｃ．育児のサポートを得るｄ．育児不安に対処するｅ．育児技術を獲得するｆ．産後の生活を整えるｇ．夫との絆を深めるｈ．両親との絆を深める、があった。

Ｂ．若年妊婦のケアニーズに対するドゥーラの役割には、１．傾聴する２．傍にいてともに経験する３．支持し、励まし賞賛する４．他者との関係を調整する、があると考えられた。

Ⅶ．引用文献

1．Joanne Goldbort,（2002），Postpartum Depression：Bridging the Gap Between Medicalized Birth and Social Support ,International Journal of Childbirth Education,（4），11-17

2．Manning-Orenstein,G（1998）A birth intervention；the therapeutic effects of doula support versus Lamaze preparation on first-time mother's working models of care giving，Alternative Therapies in Health and Medicine，4（4），73-81

3．Marcer,R.T.（1986）First-Time Motherhood, Springer Publishing

4．MarshallH.Klaus，JohnH.Kennell，PhyllisH.Klaus,（2002）／竹内徹訳（2006）ザ・ドゥーラ・ブック，メディカ出版

5．大久保功子（2000），親となることに関連する理論と研究から，ペリネイタルケア，19（1），8-13

6．益田早苗（2003），10代の性がもたらす問題の多様性，新道幸恵，新体系看護学30母性看護学①母性看護概論・母性保健／女性のライフサイクルと母性看護，（141-156），メヂカルフレンド社

7．鈴木和子，渡辺裕子（1999），家族看護学－理論と実践第２版，日本看護協会出版会
8．和田サヨ子（1990），ストレスおよび危機と援助，新道幸恵，和田サヨ子，母性の心理社会的側面と看護ケア，(9)，医学書院
9．安森文香、喜多淳子（2002），妊娠期における妊婦・家族への支援を考える～胎動感前後での妊婦の心理的変化と妊婦を取り巻く重要他者について～，ペリネイタルケア，21（9），28－32
10．吉沢豊予子，鈴木幸子他（2000），女性の成長・発達，女性の看護学：母性の健康から女性の健康へ，メヂカルフレンド社